

ひふみ神示 1 2 サブタイトル生きるということ

そなたが神つかめば、神はそなたを抱くぞ。神に抱かれたそなたは、平面から立体になるぞ。そなたが有限から無限になるぞ。神人となるのであるぞ。他のために行ぜよ。神は無理申さん。始めは子のためでも良い。親のためでも良い。自分以外の者のために、行ぜよ。奉仕せよ。嬉し嬉しの光さしそめるぞ。はじめの世界ひらけるぞ。一本足では立てん。

二本足がよいぞ。やがては明るく^{ふみ}二三の朝、フジは晴れたり、日本晴れ。(黄金の巻き 93)

生命すててかからねば、まことの理解には入れん道理。身慾信心では駄目。いのち捨てねば生命に生きられん道理。二道二股多いと申してあろう。物の文明、あしざまに申す宗教は亡びる。文明も神の働きから生まれたものぢゃ。悪も神の御働きと申すもの。悪にくむこと悪ぢゃ。善にくむより尚悪い。なぜにわからんのか。弥栄ということは歩一歩づつ喜びまして行くことぞ。歎びの裏の苦にとらわれるから判らんことに苦しむものぢゃ。苦と楽共に見てよと申してあろう。偶然の真理、早う悟れよ。(黄金の巻き 97)

悪とはカゲのことであるぞ。斜めに光を頂くから影できるのぢゃ。影は主人ではないぞ。絶対はなんと申しても絶対ぞ。相対から神を求めると、相対の神が顕れるぞ。相対で神の道に導くこと中々ぢゃ。必ず後戻り、判りはせんぞ。この神示、肚に入ったらグレンと変わりて来るぞ。早う肚に入れてくださいよ。間に合わん。天の声は内から聞こえてくる。人間の言葉は外から聞こえてくる。霊耳と申すのは内からぞ。耳を塞いでも聞こえてくるのぢゃ。悪霊自身は自身を悪と思うてないぞ。(黒鉄の巻き二十五)

運命は自由自在ものではあるが、又強いるものでもあるぞ。大きくも、小さくも、薄くも、厚く、その人の心次第に変わるぞ。もとは霊界にあるからぞ。嬉し嬉しで運命を迎える氣、結構ぞ。この世のことだけでこの世のこと動かんぞ。霊界との関係によって、この世が動いている道理判らねばならん。早う神の心に、神意さとれよ。何事も天から出てくるのぢゃ。天からとは心からのことぢゃ。(黒鉄の巻き二十九)

神は人間の想念の中に入っているのじゃ。想念が一致するから神の想念が人間に伝わるのぞ。人間の言葉となって人間に現れる。^{こと}言は神であるが人間でもあるぞ。自分が自分に語るのであるぞ。この道理よく心得なされよ。時まちて起きて下されよ。恨みの霊は中々にとけんぞ。思いは^{はたら}能き、実在と申してあろうが、間違いでも恨まれると、恨みがまといつくぞ。心して神を求め、心して幽界からのキ断ちて下されよ。わかったと思うたら天狗ぞ。省みるとよくなる仕組み。(黒鉄の巻き二十七)

人間を幸福にするのは心の向け方一つであるぞ。人間はいつも善と悪との中にいるのであるから、善のみということもなく悪のみということもない。内が神に居りて外が人に和し、内が靈に居り外が体に和せば、それでよいのぢや。そこに喜び生まれるのぢや。神から出た教えなら、他の教えとも協力して進まねばならん。教派や教義に囚われるのは邪の教え。豚に真珠となるなよ。天国の意志は人間の喜びの中に入り、幽界の意志は悲しみの中に入る。

玉とは御魂ぞ、鏡とは内に動く御力ぞ、剣とは外に動く御力ぞ、これを三種の神宝と申すぞ。今は玉がなくなっているのぞ、鏡と剣だけぞ、それで世が治まると思っているが、肝腎の真ん中ないのぞ、それでちりちりばらばらぞ。

神は言葉ぞ、言葉とはまことぞ、息吹ぞ、まこととは、まつり合わせた息吹ぞ、言葉で天地濁るぞ、言葉で天地澄むぞ、戦なくなるぞ、神国になるぞ、言葉ほど結構怖いもの無いぞ。

右に行かんとする者と、左に行かんとする者と結ぶのが渦の神ぞ、渦の神様とは素盞鳴の^{すきのう}大神ざぞ、この御用によりて生命あれるぞ、力生まれるのぞぞ、渦がまつりであるぞ、^{かみ}〇国の祀り渦であるぞ、^{かみ}〇はその全き姿ぞ。男の魂は女、女の魂は男と申して知らしてあろうがな。

洗濯と申すのは何事によらん、人間心捨ててしもうて、知恵や学に頼らずに、神の申すこと一つも疑わず、生まれ赤子の初心になりて、神の教え守ることぞ。身魂磨きと申すのは、神から授かっている身魂の命令に従うて、肉体心捨ててしもうて、神の申すとおりに背かんようにすることぞ。学や智を力と頼むうちは身魂磨けんのぞ。学越えた学、智越えた智は、神の学、神の智ざということわからんか。

病、ひらくことも、運、ひらくことも、皆己からぢや、と申してあろう。誰でも、何でもよくなるのが神の道、神の御心ぢや。親心じゃ。悪くなるということはないのぢや。迷いが迷いを生むぞ。もともと病も不運もない弥栄のみ、よろこびのみじゃ。神がよろこびじゃから、その生んだもの皆よろこびであるぞ。この道理よくわきまえよ。

十柱の神様奥山に祀りて呉よ、九柱でよいぞ、何れの神様も世の元からの肉体持たれた生き通しの神様であるぞ、この方合はして十柱となるのぞぞ。御神体の石集めさしてあろがな、篤く祀りて、辛酉の日にお祭りして呉よ。病あるかないか。災難来るか来ないかは、手届くか届かないかで分ると申してあろがな。届くとは注ぐことぞ、手首の息と腹の息と首の息と頭の息と足の息と胸の息と臍の息と脊首の息と手の息と八か所十所の息合っていれば病無

いのざぞ、災難見ないのざから、毎朝神拝みてから克く合わせてみよ、合っていたらその日には災難無いのざぞ、殊に臍の息一番大切ざぞ、若しも息合っていない時には一二三唱えよ、
 唱へ唱へて息合うまで宣れよ、何んな難儀も災難も無くしてやるぞ、この方意^{おほかむつみかみ}富加牟豆美神であるぞ。神の息と合わされると災難、病無くなるのざぞ大難小難にしてやるぞ、生命助けてやるぞ、此のことは此の方信ずる人でないと誤るから知らすでないぞ、手二本足二本いれて十柱ぞ手足一本として八柱ぞ、此のこと早う皆に知らしてどしどし安心して働くようにしてやれよ。飛行機の災難も地震罪穢れの禍も大きい災難ある時には息乱れるのざぞ、一二三祝詞と祓え祝詞と神の息吹きと息と一つになりておれば災難逃れるぞ、信ずるものばかりに知らしてやりてくれよ。

一二三祝詞

ひふみ よいむなや こともちろらね しきる ゆいつわぬ そをたはくめか うおえ
 さりへて のますあせゑほれけ

祈りは弥栄であり、限りない生活であるぞ。生命のイキであるぞ。祈りから総てのもの生まれるぞ。誠の喜びの祈りから「霊」が生命し、かげの祈りからは「身」が生命するぞ。人祈れば神祈り、人為せば神なる道理ぢや。禁欲は神の御旨ではないぞ。欲を浄化して、産めよ。今の人民、欲の聖化を忘れて御座るぞ。欲は無限に広がり、次々に新しきもの生み出すぞ。欲を導けよ。自分だけならば五尺の身体、五十年の命であるが、霊を知り、宇宙の意志を知り、神にとけ入ったならば、無限大の身体、無限の生命と足るぞ。マコトの嬉し嬉しの喜びとなるのであるぞ。

宇宙は人間の心のままと申してあるが。宇宙は未完成のものと申してあるが。永遠に未完成であり、弥栄であるぞ。そこに生命あり、喜びあるのじゃ。大神の中で、宇宙はなりなりているのであるから、ナリ、永遠になるのであるぞ。不変の中に千変万化、自由自在の存在を与えてあるのじゃ。

人間の死後、自分の命の最もふさわしい状態に置かれるのであるぞ。悪好きなら悪の、善好きなら善の状態に置かれるのであるぞ。皆々、極楽行きぢや。極楽にもピンからキリまでであるぞ。神の御旨に添う極楽を天国といい、添わぬ極楽を幽界と申すのぢや。心の世界を整理せよ。そこには無限のものがあるのであるぞ。神の理が判れば、判っただけ自分が判る。

ひふみ神示 1 2 サブタイトル生きるということ

その 79

「そなたが神つかめば、神はそなたを抱くぞ。神に抱かれたそなたは、平面から立体になるぞ。そなたが有限から無限になるぞ。神人となるのであるぞ。他のために行ぜよ。神は無理申さん。始めは子のためでも良い。親のためでも良い。自分以外の者のために、行ぜよ。

奉仕せよ。嬉し嬉しの光さしそめるぞ。はじめの世界ひらけるぞ。一本足では立てん。二本足がよいぞ。やがては明るく^{ふみ}の朝、フジは晴れたり、日本晴れ。(黄金の巻き 93)

その 79

読み解き

「そなたが神つかめば。神はそなたを抱くぞ」神をつかめとは人間の命をもらったときから働く八つの父韻（神）は中今（今という瞬間）に働きます。（イの間に働きます） だから中今に生きなさいと言うこと。そうすれば神が自分の身体に入る。

これは言葉では全く理解しがたいのですが私の主宰している合気道（合気神道）で教えています。皆さんそれを体感されています。

その状態で自分以外の者のために役に立ちなさいということです。自我を意識するとたちまちの内に中今が消え去ります。

そうすると光が差し嬉し嬉しとなり、はじめの世界が開けるとは第一精神文明が栄えたときの状態になる。一本足では立てん。二本足がよいぞ。とは第一精神文明だけでは充分ではなく、第二物質文明も必要と言うこと。そうするとやがて統合され第三の新しい文明が開け来ると言うこと。

フジは晴れたり日本晴れとは フジは不二つまり身と魂が一つになった状態の身体はすっきりと晴れ上がるぞということ。

・ ・ その 80 に続く

ひふみ神示 12 サブタイトル生きるということ

その 80

「生命すててかからねば、まことの理解には入れん道理。身慾信心では駄目。いのち捨てねば生命に生きられん道理。二道二股多いと申してあろう。物の文明、あしざまに申す宗教は亡びる。文明も神の働きから生まれたものぢや。悪も神の御働きと申すもの。悪にくむこと悪ぢや。善にくむより尚悪い。なぜにわからんのか。弥栄ということは歩一歩づつ喜びまして行くことぞ。歎びの裏の苦にとらわれるから判らんことに苦しむものぢや。苦と楽共に見てよと申してあろう。偶然の真理、早う悟れよ。(黄金の巻き 97)」

読み解き

その 80

生命すててかからねば、まことの理解には入れん道理。つまり自分の欲望・経験知（言霊ウ・オ）に生きている状態では入れない言霊エの世界 どちらも得ようとする心はすでに言霊ウの中にある。物質文明を悪いように申す宗教は亡びる。物質文明も必要だからこういう世界を作った。神の働きである。つまり生存競争、弱肉強食の世界を作ったのも神の働き。悪に憎むことは悪じゃ。弥栄というのは歩一歩づつ喜び増して行くことぞ。

世の中の動きは渦の中にある（須佐男のしらせる世界）上がったたり下がったりしながら進むということ。悪をみるということは影をみるつまり苦を見ている。光りをみよということ。そうすれば

楽とでる。偶然の真理、早うさとれよ。これは偶然はなく起こるべくして起こっていると心得よ。ということか。

・ ・ その 81 に続く

ひふみ神示 1 2 サブタイトル生きるということ

その 81

「悪とはカゲのことであるぞ。斜めに光を頂くから影できるのぢや。影は主人ではないぞ。絶対はなんと申しても絶対ぞ。相対から神を求めると、相対の神が顕れるぞ。相対で神の道に導くこと中々ぢや。必ず後戻り、判りはせんぞ。この神示、肚に入ったらグレンと変わりて来るぞ。早う肚に入れてくだされよ。間に合わん。天の声は内から聞こえてくる。人間の言葉は外から聞こえてくる。霊耳と申すのは内からぞ。耳を塞いでも聞こえてくるのぢや。悪霊自身は自身を悪と想着てないぞ。(黒鉄の巻き二十五)」

読み解き

その 81

悪とはカゲのこと、斜めに光りを頂くから影出来るのじゃ。つまり常に光りを求めれば良いのに、あるときは影の方に向き有るときは光りを向くと言うことをするといいい加減な神が顕れて、後戻りすることになるということ。光りに向け自分の良心が何時も光りの方を教えてくれる。霊耳聞こえるケースは悪霊の仕業である。悪霊は自分は悪と想着ていないぞ。

・ ・ その 82 に続く

ひふみ神示 1 2 サブタイトル生きるということ

その 82

「運命は自由自在ものではあるが、又強いるものでもあるぞ。大きくも、小さくも、薄くも、厚く、その人の心次第に変わるぞ。もとは霊界にあるからぞ。嬉し嬉しで運命を迎える氣、結構ぞ。この世のことだけでこの世のこと動かんぞ。霊界との関係によって、この世が動いている道理判らねばならん。早う神の心に、神意さとれよ。何事も天から出てくるのぢや。天からとは心からのことぢや。(黒鉄の巻き二十九)」

読み解き

その 82

運命は自由自在のものではあるが、また強いるものでもあるぞ。これは言霊ウとオで生きる人は心の使い方は先が見通せないから、自分の思うように行かないので強いられるが、言霊エで生きる人は先が読めるために自由自在である。つまり未来が全て見通せるために自由自在に運命を運ぶことが出来るということ。

人の心は霊界にある。その心の使い方を変えるだけで運命は自由自在になる。この世の事だけでこの世の事動かんぞとは心の世界を無視して、身体の世界つまり見える世界だけを意識して動かそう

と思っても思うように動かない。霊界との関係が大きい道理分らねばならんということ。早う神の心つまり自分心の中にある霊的世界の仕組み（言霊の原理を）悟れよ。何事も心次第ということ。天とは心の事、天名（あな）母音と父韻 17 音の秘密

・ ・ その 83 に続く

ひふみ神示 1 2 サブタイトル生きるということ

その 83

「神は人間の想念の中に入っているのじゃ。想念が一致するから神の想念が人間に伝わるのぞ。人間の言葉となって人間に現れる。^{こと}言は神であるが人間でもあるぞ。自分が自分に語るのであるぞ。この道理よく心得なされよ。時まちて起きて下されよ。恨みの霊は中々とけんぞ。思いは^{はたら}能き、実在と申してあろうが、間違いでも恨まれると、恨みがまといつくぞ。心して神を求め、心して幽界からのキ断ちて下されよ。わかったと思うたら天狗ぞ。省みるとよくなる仕組み。（黒鉄の巻き二十七）」

読み解き

その 83

神は人間の想念の中に入っているのじゃとは、人間が生まれたとき父韻という創造知性（火花とも言われてます）が働き出します。それは八つあります。一つ一つが違った意志の働き方をします。それを神と呼びます。その父韻と母音（宇宙に元からあるバイブレーション暗闇の世界）で組み立て一つの言霊が生まれます。また意志の働く順序その組み合わせで色々な現象が起こります。それぞれに神の名がついています。この作用が神と呼ばれることもあります。

だから言は神であるが人間でもあるということ。時まちて起きて下されよ。岩戸（^{いわと}五十音言霊図の秘密が明らかになった）開けたので起きて下さい。

恨みの霊は中々とけんぞ。とは分っている場合と、知らず知らずに他人の恨みを買うことがあります。その霊は、まとわりついてきます。人間の思いは働き、実在します。全て影を思う心がそうさせます。影を光りに変える方法を使います。

先ず心の向きの変化点を作る言葉「生かしていただいて、ありがとうございます。」を言います。あとは自分の心の向きを光りに向けます。また何か気になったら同じ事を行います。恨みの相手が分れば相手を思い浮かべて感謝の念を送れば消えていきます。幽界からの氣とは影の思いを抱くと同調して寄ってくる幽界の影の氣のこと 毎日反省することで良くなる仕組みであるということ

・ ・ その 84 に続く

ひふみ神示 1 2 サブタイトル生きるということ

その 84

「人間を幸福にするのは心の向け方一つであるぞ。人間はいつも善と悪との中にあるのであるから、善のみということもなく悪のみということもない。内が神に居りて外が人に和し、

内が霊に居り外が体に和せば、それでよいのぢや。そこに喜び生まれるのぢや。神から出た教えなら、他の教えとも協力して進まねばならん。教派や教義に囚われるのは邪の教え。豚に真珠となるなよ。天国の意志は人間の喜びの中に入り、幽界の意志は悲しみの中に入る。」

読み解き

人間を幸福にするのは心の向け方ひとつ、つまり光りの方を向く 全ての物事の光りが当たる方を見ること。人間は善悪 が分ると言うことは善と悪の中にいると言うこと、内が神に居りて外が人に和し、(言霊の最奥義天津太祝詞音図の心構造が心にある状態) 下記の下りが参考になります。

「神話天孫降臨の国譲りの預言にあるように、建御雷神と大国主の命の国譲りの場面で建御雷神と建御名方神の力比べで建御雷神が勝ちを収め天の神が主導権を譲り受けます。この事

を云っています。決して武力の争いではないのです。建御雷神が「十拳剣を抜いて波の上に逆

様に差し立てて、その剣の切先に安座をかいて大国主命にお尋ねになる・・・」とある。自己自身である母音、貴方自身である半母音、それらに挟まれた八つの父韻系十の言霊の自覚が整っている判断力を十拳剣という。すなわち建御雷神の判断力である。その十拳剣を「波の上に逆様に立てて、その切っ先に安座をかいて」とある。「剣をたてて」あれば、その剣の威力を正常に発揮することである。

「逆様に立てる。」となると、威力を発揮するとしても逆作用であることを示している。逆作用とは何か。それは相手が自分の事で分らないもの、どうしてよいか迷っているものを質問させて、それを言霊の原理で悉く解答を与えてやることである。普通に「剣を立てる」とは言霊の原理の真理を説くことであり(演繹的)、「逆に立てて」とは言霊の原理そのものを説くのではなく、相手の事情に応じて原理に照らし合わせてその不明な点を解決してやる(帰納的) ことである。」

上記の帰納的な考え方が人に和すという意味。

そこに喜び生まれるのじゃ つまり自分(言霊原理)も相手も納得出来る道があるということ。神からでた教えなら他の教えとも協力して進まねばならん、つまり相手の疑問を相手の事情に応じて原理に照らし合わせてその不明な点を解決してやること。教派や教義にとられるのは邪の教えである。天国の意志は人間の喜びに入り、幽界の意志は人間の悲しみの中に入る。天国の意志は喜びなのだ。自分も相手も、誰かが悲しむようなことは幽界の意志である。

ということ

・ ・ その 85 に続く

ひふみ神示 1 2 サブタイトル生きるということ

その 85

「玉とは御魂ぞ、鏡とは内に動く御力ぞ、剣とは外に動く御力ぞ、これを三種の神宝と申

すぞ。今は玉がなくなっているのぞ、鏡と剣だけぞ、それで世が治まると思っているが、肝腎の真ん中ないのぞ、それでちりちりばらばらぞ。」

読み解き

その 85 の 1

魂がなくなっているとは何を指すか、これは遊魂の状態を指します。鏡とは内に流れ来る氣（言霊五十音図のこと） 剣とは外に流れる氣（言霊の奥義による判断力）魂について島田正路氏の文を紹介します。

島田正路氏著コトタマ学上巻より

下記の遊魂について

遊魂について

私達は心配事があるときなど床についてもなかなか寝付かれないことが良くあります。その時はあらぬ取り留めもない考えが次から次へと頭をよぎって行きます。「こんなこと考えたって解決には何の役にも立ちほしないのだから、もう考えるのは止めよう」と何度となく心に言い聞かすのですが、いつの間にかまたその取り留めもないことを考えてしまっています。そうして眠れない夜となります。

このような迷いはどうして起こるのでしょうか。迷いという文字は八十八の道と書きます。色々な道が考えられて、さてどの道を行ったら良いか迷うことです。考えられる色々な道とはすべてその時までには経験した事、人から聞いたこと、本で読んだりテレビで見たりして得られた方法です。一長一短と思われるそれらの道がお互いに葛藤を起こして、頭の中をぐるぐると駆け巡り、どの道をとったら良いか、それが迷いです。

そんなとき、迷いに迷ったあげく「下手な考え休むに似たり。その場になればなんとか良き考えが出るだろう」と頭の中をご破算にしてしまうと、結構良い方法が思い浮かぶものなのです。この色々な考えをご破算にすること、数学で言うと零に戻ること、良い考え（適切な事物の処理方法）を取り入れる必須の条件です。このことを言霊で説明してみましょう。

ああでもない、こうでもない、と考えあぐむ事は色々な経験知のぶつかり合いであって、言霊学で言えばオの次元内の出来事です。頭の中でこれら経験知の葛藤に疲れて「出たところ勝負より仕方がない」と頭の中で葛藤をご破算します。考えることを止めます。ということは考え出した以前に変えることです。それは色々な考えが出てくる大元の宇宙、言霊でいえば言霊アに帰ることになります。この広々とした自由な宇宙に心が抱かれているのに気がつきますと、人間の主体性が回復し、それまでの葛藤を繰り返していた経験知を自由に選択・按配して実行に一步踏み出す事が出来る実践智というものが働き出してくれます。言霊工からの活動です。

・ ・ その 85 の 2 に続く

ひふみ神示 1 2 サブタイトル生きるということ

その 85 の 2

遊魂続き

以上のような「迷いから一転して実行」の課程は、この世の中に生きて行く上で良く経験することとって良いでしょう。

ところが世の中の大方の人々が以上述べた心の果てしない泥沼の葛藤を一生の間続けて、しかもそれをご破算にすることを知らずに過ごしたとしたら、考えただけでぞっとする恐ろしい事ではないでしょうか。そしてその恐ろしいことがそのまま現実であり、そこから抜け出せることが出来ない世界、それがこの世の中なのです。

人は一人前になり世の中に生きて色々な経験を積み、信念を持ち自信を深めていきます。信念はともすると他の信念とぶつかる時があります。心の中に、そして他人の信念との間に戦いが起こります。この時衝突した自分の信念や経験を心の中でご破算にし、零点に帰ることがない時、人は泥沼に足を取られ、次第に深みにはまっていきます。仏教はこの世を八苦の娑婆と呼びます。迷いから目を覚まし創造に転換する英知が湧き出てこない世の中なのです。そのあげく、個人の人生の挫折や大にしては国家・世界・人類の破滅さえ招来しかねないのが現代の世相です。

このご破算にすることを知らず一生の間続く心の葛藤は何に原因しているのか、それが遊魂のなせる技なのです。

遊魂とは文字通り遊びにでて家に帰ることを忘れてしまっている魂です。ですから遊魂は自分が家から飛び出していることすら知りません。昔からよく憑依霊だとか、狐憑き・霊に取り憑かれた、とか云う言葉をよく耳にします。人間の心に何か人間とは違う霊が取り憑く、と言う意味でしょう。けれどこのような言葉は正確ではありません。人間の魂が何かの誘惑に乗って遊びに出て行って帰ってこないのです。この魂を遊魂と呼びます。しかも人はその遊びに行った魂を自分自身だと思い込んでいるのです。

・ ・ その 85 の 3 に続く

ひふみ神示 12 サブタイトル生きるということ

その 85 の 3

遊魂続き

霊が憑く、などと言うと、誘惑するのは動物の霊だと思いがちですが、そうではありません。先鋭的なマルキニストなどはマルクス理論の中にドップリ浸ってそこを住み家としてしまっています。遊魂の遊び先きは、その他、あらゆる経験知、観念、信仰、理論から煙草、酒、美食、贅沢、ギャンブルその他多種多様限りがあります。

人間が理論を述べること、酒を飲むこと、美食をすることと・・・決して悪いことではありません。けれど理論が人となり、酒が人を呑み、美食に溺れてしまつては、万物の霊長たる資格を放棄してしまうことになりかねません。自分が遊びに出たまま帰ることを忘れていることに気付き、生まれたままの真新しい自由な魂の赤子に帰ること、神道ではこれを鎮魂帰神と呼びます。

他人の理論や習慣、ギャンブル、酒にのぼせ上がっている魂を鎮めて本来の神の子としての自主性に帰る、と言うことです。大方の人は自分が遊びに出たまま帰ることを忘れ、自分の魂の住み家・故郷を意識出来なくなっていることに気付かないでいます。

遊魂から言霊の原理を考えても、分ったようで分りません。何故なら言霊とは自らの魂の元の住み家の内容なのですから。魂の故郷に帰ってみれば、五十音の言霊は自らの生命の中に生き生きと活動していることを知ります。心の故郷・住み家に帰る、とはどこか未知の世界に帰ることはありません。生まれる前から存在し、生まれるとそこに産み落とされ、そして今が今まで絶えずに

その中に息づいている意識に帰すだけの話しです。

経験を積み、知識を増やしていくのは進歩の学問です。魂の故郷に帰る道は退歩の学と呼ばれます。そこは創造の叡智（言霊工）が無限に湧き出てくる生命の泉があります。

「あの町この町日が暮れる 今来たこの道帰りゃんせ おうちがだんだん遠くなる 今来たこの道帰りゃんせ」

話を合氣道にして見てみますと

合氣道の開祖 植芝盛平翁の言葉

合氣道はどうしても「天の浮橋に立たして」の天の浮橋に立たなければなりません。一番のもとの親様、大元霊、大神に帰一するために必要なのであります。

大神様に自己を無にして、自分は鎮魂帰神の行いにかなうように努めることであります。

一番の神業は、大神にして創造主たる神に同化、帰一和合すること、つまりその方法は与えられた勤めを尽くすこと、精霊のご神霊にむすんでゆくことである。大宇宙に同化することになるのです。

氣と流、柔、剛との境を正しく整えて、そして明らかに体得していくのを識心のいう

この宇宙の霊、体に同化し、そして和合の光のこの修行をすることを合氣道と今名づけているのであります。

この意味がよく分かります。天の浮橋とは17音の母音と父韻が働いている言霊子音が生まれる前の状態、つまり何も考えない魂の故郷（言霊工）の世界を指す。鎮魂帰神も同じ事を指す。

合氣神道の動きはこの遊魂を無くして（鎮魂帰神・中心帰納・臍下の一点に心を鎮める・中心力すべて同じ事を指しています）中心に魂を置いた状態での動きを身に付ける稽古をします。

以上のように遊魂になっているので魂がないと表現している。真ん中中心がないとはこのことです。だから鎮魂帰神になりなさい。もとの心の住み家に帰りなさいと言うことである。

・ ・ その86に続く

ひふみ神示12 サブタイトル生きるということ

その86

「神は言葉ぞ、言葉とはまことぞ、息吹ぞ、まこととは、まつり合わした息吹ぞ、言葉で天地濁るぞ、言葉で天地澄むぞ、戦なくなるぞ、神国になるぞ、言葉ほど結構怖いもの無いぞ。」

読み解き

神は言葉ぞ、言霊の中では五十音一つ一つが神ですが、主に八つの父韻が五つの母音に掛け合わされて言葉が生まれます。子音32個です。この言葉は父と母の掛け合わされた（つまり真に釣り合った＝マツリ）言葉で人間の口から発せられるまつり合わした息吹そのもの、光りの言葉は天地晴れ、影の言葉は天地濁る、つまり言葉次第で戦もなくなる、が逆に言葉が悪ければ戦も起こる、言葉ほど怖いものはないということ。

言霊ウとオの心の構造は生存競争・弱肉強食・争いの世界を創り出します。心の構造にしたがった

言葉の使い方つまり意志の使い方（父韻の並び）がキシチニヒミイリ・キチミヒリニイシになります。

言霊アの心の構造は感情・芸術・宗教の心を創り出します。チキリヒシニイミこの心は宇宙と自分とは同根の境地にあります。光りに包まれ自分だけならこれで満足しています。

言霊エの心の構造は言霊ア（自利の道）から他利の道に更に進みます。他の人を助ける道です。全てを自分の事として捉えその時所位においてアの心境でどのように対処するのかを選び言葉をかけていきます。チキリヒシニミの並びです。政治・道徳の世界 この三つの心の使い方を須佐男（ウとオ）・月読み（オとア）・天照らす（アとオ）と呼んでいます。

それぞれの心の構造でこの世は光りにもなり闇にもなります。人間の創造知性つまり父韻の働きです。この父韻が神と呼ばれる所以です。

・・・その 87 に続く

ひふみ神示 1 2 サブタイトル生きるということ

その 87

「右に行かんとする者と、左に行かんとする者と結ぶのが渦の神ぞ、渦の神様とは素^す蓋^き鳴^{のう}の大神ぞ、この御用によりて生命あれるぞ、力生まれるのぞ、渦がまつりであるぞ、神国の祀り渦であるぞ、神はその全き姿ぞ。男の魂は女、女の魂は男と申して知らしてあろがな。」

読み解き

この海原（うなはら）を知らずのは須佐男の命（素^す蓋^き鳴^{のう}尊のハタラキ）渦の働きと有ります。つまり現実界の全てのものに働いているのは渦の動きです。水が流れ出る動き、台風、竜巻、滝の動き、川の流れ、潮の流れ、空気の流れ、風のながれも渦 力の働き方も渦（合気道の動きで確認できます。）

渦がマツリとは右と左、上と下、男と女、光りと闇、善と悪、霊と体、内と外、・・・父韻と母音・・・

全て真に釣り合う（真^ま釣り）であるとそれぞれを一つにまとめて流れていくと思えば分かりやすい。

須佐男の命が治めるのがこの生きている世界です。（現界）、神の国祀りとは父韻と母音の掛合わさった言霊でそれによって出来上がった言葉で全てのものに名前が付けられ、文明が花咲いた国つま

り^ひ霊^{もと}の^{くに}元^{くに}の国=日本です。そこには言霊の氣の流れが（渦の流れ）常に働きます。それが日本語というものです。それを話す国民が日本人です。

・・・その 88 に続く

ひふみ神示 1 2 サブタイトル生きるということ

その 88

「洗濯と申すのは何事によらん、人間心捨ててしもうて、知恵や学に頼らずに、神の申す

こと一つも疑わず、生まれ赤子の初心になりて、神の教え守ることぞ。身魂磨きと申すのは、神から授かっている身魂の命令に従うて、肉体心捨ててしもうて、神の申すとおりに背かんようにすることぞ。学や智を力と頼むうちは身魂磨けんのぞ。学越えた学、智越えた智は、神の学、神の智ざということわからんか。」

読み解き

洗濯というのは人間心（言霊ウの欲望心）捨ててしもうて、知恵や学（言霊オの学問・経験知の心）に頼らず、神の申すことも疑わず（神示にあること疑わず）、生まれ赤子の初心になりて、（生まれた元の心の状態になって）、神の教え守ることぞ（良心に従い）行動すること。身魂磨きと申すのは、神から授かっている御魂の命令に従うて、肉体心捨ててしもうて、（元の宇宙に帰り＝鎮魂帰神＝遊魂が元に収まり）、そこで思う判断（言霊エの心に任せ）良心に背かない様にする事ぞ。学や智を力と頼むうちは（言霊オの心経験知に頼る内は）身魂は磨けんぞ。学超えた学、智超えた智、神の学、神の智（実践智・言霊エの心）だということ。

・ ・ その 89 に続く

ひふみ神示 1 2 サブタイトル生きるということ

その 89

「病、ひらくことも、運、ひらくことも、皆己からぢゃ、と申してあろう。誰でも、何でもよくなるのが神の道、神の御心ぢゃ。親心ぢゃ。悪くなるということはないのぢゃ。迷いが迷いを生むぞ。もともと病も不運もない弥栄のみ、よろこびのみぢゃ。神がよろこびぢゃから、その生んだもの皆よろこびであるぞ。この道理よくわきまえよ。」

読み解き

病、ひらくことも、運、開くことも、皆己からぢゃ、と申してあろう。つまり病とは健康に対して影の面である、光りを見ないで影を見るから病になる自分がそうしている。運、開くことも 運とは自分の心が運ぶのであり、言霊ウ・オに生きることは影の世界に生きる事、言霊ア・エが光りの世界となる。自分の心の使い方つまり言霊父韻の使い方言霊ア・チキリヒシニイミ・ 言霊エ・チキミヒリニイシの並びの心を使うことで変わる。何でもよくなるのが神の道親心。悪くなるということがない。もともと病も不運もない弥栄のみ。喜びのみ。神が喜びだから、その子も皆喜びであるぞ。光りを見よ、つまり言霊エの心を取り戻せ、そこには病（言霊エは光りの世界）も不運（言霊エの心は自分の行く先が読めるので不運もない）もない。

この道理をよく心得よ。

つまり人間の性能は言霊ウ・オ・アだけでなくエ・と・イも含めて全てである。

・ ・ その 90 に続く

ひふみ神示 1 2 サブタイトル生きるということ

その 90

「十柱の神様奥山に祀りて呉よ、九柱でよいぞ、何れの神様も世の元からの肉体持たれた生き通しの神様であるぞ、この方合はして十柱となるのぞぞ。御神体の石集めさしてあろがな、篤く祀りて、辛酉の日にお祭りして呉よ。病あるかないか。災難来るか来ないかは、手届くか届かないかで分ると申してあろがな。届くとは注ぐことぞ、手首の息と腹の息と首の息と頭の息と足の息と胸の息と臍の息と脊首の息と手の息と八か所十所の息合っていれば病無いのぞぞ、災難見ないのぞから、毎朝神拝みてから克く合わしてみよ、合っていたらその日には災難無いのぞぞ、殊に臍の息一番大切ぞぞ、若しも息合っていない時には一二三唱えよ、唱へ唱へて息合うまで宣れよ、何んな難儀も災難も無くしてやるぞ、この方意富加牟

豆美神であるぞ。神の息と合わされると災難、病無くなるのぞぞ大難小難にしてやるぞ、生命助けてやるぞ、此のことは此の方信ずる人でないと誤るから知らずでないぞ、手二本足二本いれて十柱ぞ手足一本として八柱ぞ、此のこと早う皆に知らしてどしどし安心して働くようにしてやれよ。飛行機の災難も地震罪穢れの禍も大きい災難ある時には息乱れるのぞぞ、一二三祝詞と祓え祝詞と神の息吹きと息と一つになりておれば災難逃れるぞ、信ずるものばかりに知らしてやりてくれよ。

一二三祝詞

ひふみ よいむなや こともちろらね しきる ゆいつわぬ そをたはくめか うおえ
さりへて のますあせゑほれけ」

その 90

読み解き

十柱の神様とは下記に続く文から推測します。臍・腹・胸・首・頭 身体の周波数から見ると臍＝言霊ウ 腹＝言霊オ 胸＝言霊ア 首＝言霊エ 頭＝言霊イ に当たりますそれに両手と両足入れて 九柱の神、この方とは自分自身、言霊エの心を持った霊知りとしての自分＝国常立の太神の事である。

自分の身体に病が有るか無いか。災難が来るか来ないかは、手届くか届かないかでわかる。つまり届くとは注ぐ事ぞ、と有ります。つまり神にお祈りの後その氣を身体に注ぐ事を指しています。それぞれの箇所神の氣を吸い入れてその氣の流れが感じられれば大丈夫ということ、ことに臍の息合わせ大事だと、臍に息を吸い入れて流れを感じれば ok

と言うこと合っていなければ（つまり流れを感じなければ）一二三祝詞を唱えよ、一二三祝詞は前にも説明したように言霊エの世界を実践するための方法を解いたものです。それを唱えよと、氣が頭にあるときは流れが感じられず、唱え続けると心が落ちて下肚に収まり氣の流れを感じるようになるということ

どんな災難もなくしてやるぞこの方意富加牟豆美神＝伊耶那岐の命を黄泉の軍勢から助けた桃の実つまり天照大神のことである。（言霊エの心は天照らすの心つまり光りの心である。）

一二三祝詞の意味合いを書きます。島田正路氏の著書より

